

特別活動研究委員会

1, 研究テーマ

「互いに認め合い、高め合える集団作りのあり方
- 学校生活の向上を目指すことができる集団を求めて - 」

2, 研究課題

郡の研究テーマ『確かな学力を育む授業の創造』を考えたとき、子どもが自ら考え、生き生きと追求しながら学ぶ喜びを感じ、確かな学力をつける授業を創っていきたい、という願いがあがる。このような授業の展開は子どもが単独に行えるものではなく、学習集団が必要となる。一人一人の居場所があり、お互いに認め合い高め合える風土がその集団にあってこそ築いていけることとなる。この学習集団とは、学校生活の根幹となる学級集団であり、その学級作りは特別活動の領域が大きく担う内容である。特別活動の特質及び方法原理が示す「望ましい集団活動」を可能にする集団作りなのである。

授業校の東中学校では、新入生や新2年生の学級開きをスタートとして、学級作りを基盤とした学級活動を大事にしている。学校目標の具現化として、本年度の重点目標に「人間関係を形成する力の向上」が掲げられてもいる。そうした授業校の方向と本委員会の願いを重ね、上記の研究テーマを決めだし、以下の点から研究を推進することとした。

- (1) 学級の人間関係の実態把握(日常観察・人間関係アンケート・春・秋のQ-U実施)
- (2) 学級生活の向上を意識化させる短学活
- (3) 考えの発信・共有の場としての短学活
- (4) 学級生活を活性化させる学級独自の活動
- (5) 学級活動における「話し合い」の指導



3, 指導の実際

平成19年11月 7日(水)

授業学級 東中学校 1年2組

授業者 太田五十鈴 教諭

題材名 「新1年生を迎える準備をしよう」

指導者 長野教育事務所 指導主事 竜野 正英 先生

生徒の実態として、人間関係を形成する力が弱くなってきている傾向がある。二つの小学校から入学した後の様子では、小学校時の友達関係に固執したり、お互いに牽制し合ったりして、学級集団としてまとまるのにかなりの時間がかかっていた。そこで人間関係を広げるゲームを取り入れ、関係作りを意図的に進めた。さらに、短学活の充実を図ったり、学級の活動の活性化・活発化を願って学級独自の活動を仕組んだりしてきた。

公開授業では、「新1年生を迎える準備をしよう」の題材で授業を行なった。前時では、新1年生に向けて東中学校の学校説明会を学級で行うために、あらかじめ個人が作成した企画をグループで集約して練り上げ、学級にプレゼンテーションを行えるように3分間にまとめた。本時では、そのプレゼンテーションを発表し合い、アドバイスを寄せ合う授業を展開した。事前に行なったQ-Uの分析では、お互いの承認度がやや低い傾向があることから、お互いに認め合うことを実感させたいと教師が願い、グループ発表の良さを付箋に記し、寄せ合い、発信し合う活動を仕組んだ。付箋は限られた時間で一斉に発信できる利点があった。

グループの模造紙に貼られた付箋を読んで自然と笑顔になる生徒、顔を寄せ合いお互いに達成感を確認められるグループ、嬉しかったコメントを発表する活動から認め合いの良さを共有したり、自分のメッセージが相手の嬉しさにつながり自己の有能感を得たりできる学級の様子から、この学級で自分が大切にされている、この学級で自分が役に立っていることが実感できた授業だった。

4 , 事例から明らかになったこと

(1) 学級の人間関係の実態把握 (日常観察・人間関係アンケート・春・秋の Q - U 実施)

学級担任や教科担任の日常観察からの情報交換、友達・人間関係についてのアンケート (東中学校版)、Q - U の実施を通して、学級の様相を分析した。このことから学習のねらいがより焦点化できたり、意図的に活動を仕組んだりすることができたりした。

(2) 学級生活の向上を意識化させる短学活

朝・午後の学級活動 (短学活) の進行を当番制とし、日々学級担任との打合せを通して司会の仕方を徹底した。また、正副学級長からの話を位置づけることで、学級生活の向上を意識できるような働きかけができるようにした。このことから、リーダーとしての自覚が高まったり、生徒が学級への願いを持ち、問題点を発信できる素地作りができたりした。

(3) 考えの発信・共有の場としての短学活

短学活に、学習係が提示したテーマに沿って話す、30秒スピーチを位置づけた。さらに、週に一度、スピーチに対する考えをまとめて生活記録に記し、それを学級通信に載せて発信した。発表する力や学級の一員としてより良い生活をしていこうとする態度が向上し、仲間の考えを共有し合い、集団の凝集性が高まってきた。

(4) 学級生活を活性化させる学級独自の活動

時期に応じた学級独自のプロジェクトを短学活に取り入れて行なってきた。加えて、レクリエーションや文化祭の練習、親子レクリエーションにも取り組んできた。それらは、学級担任の支援のもとに学級の係が推進してきた。こうした集団の向上に貢献する体験から、活動への満足感や達成感が高まってきた。

(5) 学級活動における「話し合い」の指導

自ら課題を持ち、主体的に判断して自己をのびのびと表現する生徒、互いの違いを認め合ったり、人権を尊重し合ったりする生徒、目標や責任を持って粘り強く活動をやり抜く生徒を願って、話し合いを仕組んできた。

本時では、グループ・個人に寄せられた付箋をじっくりと見る時間を大事にした。そこでは、書いてある内容から伝わるグループの発表の良さ、役割を演じたり発表したりした自分の良さを感じ取るように授業者が働きかけた。また、授業者と学級長が分担し、インタビュー形式で寄せられた良さをお互いに発表し合った。発表する生徒は、生活の様子や Q - U のデータより、仲間からの承認が低いと感じている生徒を対象とし、発表を通して自己有能感が得られるような授業者の配慮もあった。その活動から、良さを再確認すると共に、自分が寄せた良さが相手に響いたことが分かり、温かな雰囲気教室が包まれた。さらに授業者が、良さを伝え合うことができた学級を高く評価した。研究会では授業の成果と合わせて、認め合いの雰囲気がここまであるならば、より良い発表を目指して指摘し合う話し合いも可能であり、またその話し合いが必要ではないかという意見が交わされた。

授業者の今までの支援の積み上げも合わせて、学級の活動を通して集団の一員としてより良くしていこうとする自主的・実践的な態度の高まりを検証することができた。



5 , 来年度への課題

- 人間関係を形成する力が弱い傾向は、授業校にかかわらず多くの学校で見られる。集団の中でこそ育むことができる力であり、将来社会で必要とされる力であることから、学級活動の領域の内容として大事にしていきたい。以前の対人関係ゲームへの取り組みに加え、本年度の「話し合い」に焦点をあてながら追究するののも一つの方向である。
- 本委員会の構成を見ると、平成17年度は9校11名、平成18年度は8校14名、平成19年度は7校12名と、限られた学校及び委員の所属である。特別活動は誰もが専門性を高めなければならない領域である。研究体制の視点からも、推進のあり方を見極めていきたい。